

[ No.17 もし、今ここで死んじゃったら…の巻 ]

窓から見えるドロミテ山脈の先端が、少しずつ目に迫ってきた。

ミュンヘンからミラノへ飛んでいる途中、飛行機の高度がずっと下がったと思ったら、突然「エマージェンシー！」のコールが響いた。終わった軽食のトレイを床に置くように言われ、キャーと騒ぐ人の声も聞こえた。

日本とヨーロッパ間だけでなく、ヨーロッパの中も結構数多く飛んでいたが、初めて「飛行中の問題」に遭遇。原因は何だったのかわからないが、とにかく高度が下がっていく。ただ、ミュンヘンーミラノ間は大した距離でないのも、もともとの高度はそれほど高くはなかったはずだ。

何人かの CA が慌ただしく動き、席に着き、緊張感が走る。どんどんと近くなる鋭いドロミテ山脈の尖った山肌を見ながら、私が何を考えたか！？ 信じてもらえるかどうかかわからないが、自分でもものすごく不思議なほど、まったくパニックにはならなかった。だって、こんな場所で、飛行機事故で墜落したら、どうせ助かるわけではない。だから、今更キャーキャー言っても、全然意味ないじゃない！ と本当に思った。そしてそのあと頭に浮かんだ思いは、「ミラノの空港に出迎えてくれている(元)夫は驚くだろうな」、「日本の両親はこれをどうやって知るのだろうか」、極め付きは、「あ～あ、家をもう少しきちんと片付けて出てくればよかった！」だったのだ。今振り返っても、何のドキドキもしなかったというのは、誇張ではない。言っておくが、「自慢」ではまったくくない！ ふと思うに、もしかしたら感覚が少し「鈍い」のかもしれない。

幸い飛行機は持ち直し、少し遅れただけでミラノ空港に無事到着。なんでも山脈からの風の吹き降ろしだか吹き上げの影響だったそうだ。乗客はかなり怒っていた。というのは、その前の週も同じような問題が起こったらしいから。もう少しきちんとルートを検討して飛ぶように、とかいうお達しが出たそうだ。

これが、「死ぬかもしれない」場面に遭遇した初めての時。

そして、それから次の何年か後も、飛行機でのことだった。とは言え、今度は大勢の音楽仲間と一緒に。(元)夫もいた。

「ウィーン音楽週間」と名付けられた、3週間にわたってカリブ海を巡った大型クルーズ船での休暇兼“仕事”を終えて、香港からドイツに戻るフライトに乗る。ただその日は、ものすごい、ものすごい台風だった。傘を差しながらタラップを上ろうとしても、傘は意味なしでビショビショ、体中がふらつくほどの暴風雨。日本だったらおそらくキャンセル便になっていただろう。

しかしなぜか、そのころまだイギリス領だった香港からのルフトハンザは、時間通りに飛ぶことになっていて、デュッセルドルフからの乗継便のある仲間たちは、どち

らかというと“喜んで”いた。そして、乗った。飛んだ。

でも経験したことがないほどの見事な揺れっぷりだった。それも「揺れ」だけではなく、機内でギシギシいう音がメチャクチャ激しかった。まるで、次の瞬間に飛行機の翼はもぎ取られ、全体がバラバラになって、すっ飛んで行ってしまいそうなほどの音が、すごい横揺れとともに響く。

誰かが、「横揺れは大丈夫なんだってよ、縦揺れは危ないらしいけど」なんていう、慰めのような言葉を唱えていた。機内には、確かに緊張感が漂っていた。周りにはヘンなクスクス笑いや、読んでもいない本を手にして固まったままのヴァイオリニストがいた。

私…？ 実は記すのもちょっと気が引けるが、例によって、「今ここで考えたり騒いだって、自分では何にもできないじゃない」。そして、何が起こるにしても、一番「楽なはず」な可能性に身を委ねた。つまり、寝た。本当に眠ってしまったのだ。おそらく30分くらい経ったころだったと思う。私の顔の周りや耳のそばで、「ねえ、本当に寝てるよ！」という声がくすくす笑いととも聞こえて、目が覚めると、いくつかの友人の顔が私を見つめていた。揺れはだいぶ収まっていたと思うが、オランダから来ていたマジシャンのマネージャーが、白目をむいて気絶していて、彼のパートナーが泣きながら、「ねえ、目を開けてよ！」と、何回も頬を張っていたのを思い出す。

そして確か、2012年。父が介護施設に移って3, 4年経ち、そろそろ最期を迎えようとしていた。母も体力の衰えが顕著になってきていたので、私はできるだけ日本の両親のそばにいられるように、帰国のスケジュールを組んでいた。(ウィーンの義父は2004年に亡くなったのだが、義母はなんとか自宅で介護を受けながら過ごしていたので、私が日本に行くたびに、「なんでまた日本なの？ 早く帰って来てね」と寂しがっていた。)

父は、私が施設に泊まり込んでいる間も、何度か不思議なほど持ち直し、(一度などは、会いたいと言っていた親戚を6, 7人集めてしまったほどだったのに！)、とは言え、いつ何時何が起きるかわからないという緊張感からか、私はあまり睡眠がとれない状態が続いていた。

そんな中、イギリスでのコンサートに4日間ほど出かけることになった。いつでもどこでも眠れる私にしては、(特に飛行機の中は“大得意のはずだった！)、様々なことが頭の中を巡って、まんじりとしないうままロンドンのヒースロー空港に着いた。空港からの地下鉄に乗り、また乗り換えてパディントン駅からマンチェスターまで。それから現地でリハーサルなので、本当は機内で少し体を休めたかったのだが、仕方がない。

何となくボーっとした気分のまま、あまり意識もせず、ルーティンのように地下鉄

の駅に向かうエスカレーターに乗った。スーツケースは4輪駆動、ちょっと不安定な感じだったが、自分の前に置いて支えようと思ったその瞬間、持ち手から滑り落ちていった。「きゃあー！」という自分の声だけは記憶にある。しかし、それ以外、というかその後のことは、ただただブラック・アウト。

おそらく、スーツケースを追いかけて頭から3m以上、エスカレーターを転がり落ちたのだろう。だろう、としか言えないくらい、本当に何も覚えていない。気を失うとはこういうことなのか、と目覚めた時に思った。もしかしたら死の直前には、「恐怖」を味わわないようにと、「神様」が何も見えなく、何も感じなくしてくれるのかもしれない。

でも、多分ほんの何秒かのことだったのだと思う。転がったまま目を開けたら、頭の上に10人近くの人たちの心配そうな顔があった。地下鉄駅の安全係の駅員も3人ほどいたと思う。地面に目をやると、飛び散った血が周りに何点も見えた。私の内心は、「さてこれからどうしよう」。

まず自己確認。だって、演奏会ができるかどうかがかかっているのだから。

- 1、コンタクトレンズは無事にそのまま目に入っていた。
- 2、足は(ヒールの靴だったのに)捻挫はしていないみたい。でももしかしたら後から痛みが出る可能性も？
- 3、舌で確かめるに、歯も欠けていないようだ。でもこの血はどこから？
- 4、コートにも染みはないし、頭に手をやったが、頭からの出血ではない。
- 5、荷物も少しは散らばったが、大したことはない。

と、皆の注目を集めながら、立ち上がってみた。不思議なほど、何の影響も感じない。でもどこを打ったのかもわからないので、周りの駅員さんたちに誘導されながら、(普通に)歩いて駅の部屋へ。(芝居がかって見えたかもしれず、ちょっと照れ臭かったが。)  
「調書」みたいなものを書かなければいけないらしい。

座ってからまず言ったことは、「すみません、鏡をかしていただけますか？」一応自分の顔を見ておきたかったのだ。あの血はどこから出ていたのか、顔のどこかに傷があるか、調べて見なければならぬ。でも鏡で見た顔は「全然そんなにひどくないじゃない？」と駅員さんに言って、そのまま引き上げようとした。その後ヴィクトリア駅に行って、パディントン駅でマンチェスター行きの列車に乗らなければならないのだもの。時間は、まあ何とかうまく間に合いそうだった。

ところが、駅員さんを振り切るのが結構大変だった。彼らにしてみれば、あとで何かあったら責任問題になるからのようだ。近くの病院に行って一度診察を、としつこかったが、イギリスの病院に突然行くのだけは「絶対に」(理由はある！)避けたかった私は、なんかの紙にサインをして解放してもらった。

と、これが、私の「死への冒険」の3回目だ。最終的な結果を簡単に書くと、一目見ただけでは誰にも何もわからない顔つきだった。歩くことも問題なくできた。出血

は、前の上歯が下唇を突き抜けていた箇所からだった。本来なら病院で手当てをしてもらうべきだったのかもしれないが、またまた私の超楽観的性格が出た。

1, 口の中の出血はわりと早く止まるのではないか

2, 唾液には自然の殺菌治癒効果があるはず

3, パディントン駅には消毒液を売っているだろう（実際にエタノールと綿棒を買った）

そして、マンチェスターに向かう列車の中で、5分おきくらいに、綿棒とエタノールで口の中からと外から消毒し続けたら、出血も全くとまり、痛みも感じなかった。

実は、極め付きがある。ピアニストとはリハーサルの後、夕食の約束もしていたのだが、なんと（とてもおいしいと知られている）インド料理屋でカレーを食べた…。（彼女には、心配かけたくなくて、空港事件の話は一言もしなかった。）

さすがの私もこの「カレー」はちょっと心配だったが、まったく問題はなかった。

コンサートも無事終わったが、この「事件」の話は高齢の両親には絶対内緒にした。今までに話したのは(元)夫だけである。というのは彼もよく演奏旅行で、同じようなシチュエーションに出会う可能性があると思ったからだ。普段は神頼みとか信心深さとは程遠い彼、なんと、「きっと君の頭上で“守護天使”が翼を広げて、守ってくれたんだね」なんていうベタな言葉で慰めてくれた！

そして、この3回の“危機”の経験を共有した彼は、私に尋ねた。

「そんな時にはいつもドンと構えて動じないくせに、なんで本番のステージの時にはドキドキしたりアガったりするんだ?!」

しばし考えた私が見つけた答え。

「だって、コンサートのときは、なんでもっと十分に練習しなかったのだろう、とか、努力が足りないんじゃないかとか、もっとうまく歌いたいとか欲も出たりで、結果は“自分のせい”で左右される気がするけれど、事故の時はジタバタしたって、もう自分ではどうしようもできないじゃない?!」今でもそう思う。